

# 第20回むつ市総合教育会議議事録

開催日時： 令和4年8月26日（14：00～14：50）

開催場所： むつ市役所 大会議室B

出席者： 宮下 宗一郎 市長  
阿部 謙一 教育長  
田中 志昌 教育委員  
黒木 和之 教育委員  
納谷 順子 教育委員  
長岡 俊成 教育委員

事務局	教育委員会	伊藤	教育部長
		鷺岳	政策推進監
		工藤	総務課長
		祐川	副理事（学校教育課長）
		桜井	副理事（図書館長）
		畑山	生涯学習課長
		木村	中央公民館長
		金浜	川内公民館長
		二本柳	大畑公民館長
		山崎	脇野沢公民館長
		佐藤	学校教育課総括主幹
		新田	総務課主任主査
		関	総務課主任



# 1. 議事

**事務局：** ただいまより、第20回むつ市総合教育会議を開催いたします。

はじめに、本日の総合教育会議につきまして、簡単にご説明をさせていただきます。

この会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に定められた会議で、教育学術および文化の振興に関する総合的な施策の大綱の策定、教育に関する重点的に講ずべき施策の策定、そして、児童生徒等の生命、または身体に被害が生ずる場合等の緊急の場合に講ずべき施策について、市長と教育委員会が協議を行うことを目的としております。

それではさっそく議事に移らせていただきます。

会議の議長は市長に努めていただきます。市長よろしく願いいたします。

**宮下市長：** はい、よろしく願いいたします。

私の思いをまずわかっただくと、教育委員会制度そのものっていうのは非常にこう難しい制度だなあっていうふうに思っています。

委員の先生方も感じていただいているところは大きいと思うんですが、第2次世界大戦が終戦して、アメリカのGHQの占領下にあって、戦前の教育っていうのがものすごくこう反省すべきものだというふうに叩き込まれ、その時、政治の世界と教育の世界を切り離すべきだと、議論があつて。分権はされたものの、さらに委員会制度という中で、市長部局として、この教育分野というのが、大きく切り離されている。

そうした中、すごくいつも感じているのは、自分も政策分野ってたくさんあつて、まあ8年間、仕事をしていて力を入れたところっていうのは、ダイレクトに改善されるんです。

力を入れるっていうのは、まさに権限やその財源を駆使する。力を入れる分野っていうのは様々で、ダイレクトに。ところが気持ちの中では教育分野っていうのもすごく大事にしている、かなり投資をしたというところは自分の気持ちとしてはあるんですが、なかなかこう成果として現れない。もしかしたら教育っていうことの本質はそういうところにあるのかもしれないけど、成果として現れない。まあ、具体的に言うと、学力向上ずっと前から言っているけど、むしろ悪くなってですね。むつ市内の子供たちの学力。それから、ジオパーク一つとっても、認定されて様々取り組んでくれているんですが、何ていうかオリジナリティーを發揮するような学校がまだなかなか出てこないんです。校長先生によっては一生懸命やってくれるところが出てくるんですが、全体としてはそうでもない。

唯一、権限っていうところを超えて、この教育大綱っていうのが、市長と子供たちを繋ぐ唯一の方針なのかなというふうに思っていて、5年に1回の改定っていうのを、私自身は非常に重要だなと思っているし、重大な。そして、この大綱に基づいて様々なむつ市内の教育施策っていうのは、これからですね、さらに改善されていくべきだというふうに思っていますので、予め2、3日前になりましたけれども、私の現在の案について、委員の方々からですね、今日は率直なご意見をお伺いして、その意見を十分に踏まえてですね、各校長先生方に見ていただいて、さらにはパブリックコメントという形で、住む方々に見ていただいて、作り込んでいきたいな、というふうに思います。

限られた時間で、限られたスケジュールでやりますけれども、そういう思いを持って進めさせていただきますので、どうぞ皆さんよろしく願いいたします。

それではですね。さっそくご意見を賜りたいと存じます。順次行きますが、田中先生か

らお願いいたします

**田中委員：** はい。先ほど説明を聞いていますので、内容に関しては、その時に質問を申し上げたので、私の考えを話したいと思います。まず、学力の向上ってということに関して一番先にあげ、先ほど市長からあまり目標達成できてないっていうことでしたね。やっぱりこれは、本人のやる気、地域の周りの競争力とかの問題が半分あると思うんです。

自分の孫が東京に住んでいて、周りの環境を聞くと、あまりにも違うんですよ。その塾の通い方から何から。小学校の低学年まで。うちの孫1年生なんですけど、その周りの環境があまりにも違っている。普通に教育の競争をして地方でも本当に戦えるのかな。そういう子供たちは、テストの点数の全国評価の中に出てこない子供たちなんです。おそらく、私立の学校に行って、そのままエスカレーター式で慶応とかに行く子たちばかりなので、なかなかそういう中でも、1対1の競争というのは難しいので、この辺のところは具体的な方策を、言葉だけではなくて、考えていく必要があるんだと思います。

もう一つ、すごい気になるのは、歯科医として37、38年になるんですけども、昔はですね、お子さんを連れて来るお母さんは絶対に診察室に入らない。でも今は90%以上に入ります。そして、怖い事に高校生のお子さんでも一緒に入ってくるんです。高校生の方が足元でお母さんが付き添っているんです。昔はありえませんでした。せいぜい、小学校の低学年でした。でも今、小学校ほとんど100%一緒に入ります。中学校でも5割。

高校入っても一緒に入る。自立心がないとしか思えない。私、それから考えて、家庭環境をもう少しきちんと指導しないと、自立心を持った子供は生まれにくいんじゃないかと思ってます。時々家庭環境で言っちゃうんですが、ただ、少子化の中で、どうしても

ない部分があると思えば、やはり、その辺のところも具体的にどういう風な対策として、その家庭をどうするかっていうのもやっぱり考えなきゃいけない。

最後にですね、キャリア教育に関してですけど、キャリア教育は素晴らしいと思います。実は私ごとなんですけども、脇野沢中学校の2年生がこの間キャリア教育に来ました。学校の方からあのお願ひされて2日間朝連れてきて、3時半ぐらいに迎えに来てくれて、2日間通って病院の中の仕事を手伝ってもらいました。本当にあの学校の先生からも非常に丁寧なあいさつありましたし、本人も感想文ちゃんとしてくれて、チームのエースだったんですが、そのお礼の手紙をよこして、これから先の役に立ちますって言われました。これ2件目で前に近川中学校の子が1回来て、我々としては、そうやって一生懸命やってくれるのはちゃんとそうやって、中でも指導担当を作って対応できると思っているんですよ。ただ、実際にそういう形ができるのは小規模校だからやっている可能性もあるんで、大規模校だとできない。ただ、いろんな意味でね、そういうことを団体でやってしまっただけですね、なかなか自立心が育たないと思います。一人ずつそうやって出せば、多分、いろんな体験を個人として出来ると思うので、私はキャリア教育の中にそういうカリキュラムを入れてほしいかなっていう気がします。それはあくまでもその実践のものだけじゃなくて、そのいろんな映像とか、経験談をそのあたりでもって、示してだっというのをその段階によって、小学校はこういう事、中学校はこういう事をして、一度は 実際、その仕事に現場でもって肌で感じるというふうなシステムを作ってあげられたらなというのは、あまりこれは大変なことを言うところではないと思うんですが、まあそういうことも踏まえた上での大綱作り。連携する、協力するだけじゃなくて、具体的なものをもう少し入れてほし

いかな。

最後にですね。これはさっきも言いましたけど、6ページにですね、「安全防災教育の推進」の1行上の行、「学校、家庭、地域が連携しながら取り組む」っていうところですが、私のなかでも家庭っていうのはやっぱり一番弱い立場にあると思って。家庭を支援するっていうふうにしてほしいと思います。家庭を支援することで、家庭っていうのは安心して子供を育てられるので、対等の立場で連携するのではなくて、家庭を支援してほしい、絶対支援の必要な家庭ってあるような気がするんですよ。それはあの線引きはできないと思いますけど、そういう姿勢を示すことで、家庭は安心安全、安心が出るんじゃないかなというふうに思っていますので、是非ともよろしくお願ひしたいと思います。

以上です。

**宮下市長：** ありがとうございます。1点目の学力の向上ですが、具体的な方策が必要っていうのはまさにその通りだと思っていて、教育格差っていうことはさておき、そのあたり、是非私も触れていきたいなというふうに思っています。

2点目の診療室に高校生の親が入る、さもありませんね。ワクチンの接種見ている、大規模接種会場に、高校生の親ついてくるんですよ。180cmぐらいの男の子のお母さんがついてくるっていうですね。信じられない光景みているので、まあそういう感じなので、家庭の支援っていうのは、学校教育では限られた部分しかできないのかもしれませんが、市全体で見ると子ども家庭課とかありますし、どうやって、やっていくのかはさておき、子供との向き合い方っていうのは、すごく大事なことだと思うので、それもしっかりと書き込んでいきたいなと思います。

キャリア教育も、なんかコンセプトがないんですよ。すごくやってはいると思うんですよ。ユメココにしても、各職場体験にしてもで

すね。ただ、先生が非常にその自立を助けるためにやっているのかというところでいくと、決してそんなことはなくて、ただ単に、多分その受け入れる所どこですか、受け入れてくれるところに、対して人数の割合で出しているだけで、子供たちの希望を第一希望から、第三希望まで、大きい学校はですね。だって必ずしも希望通りに入っていない。受け入れ先の方も見ていてもですね、プログラム作っていないんですよ。市役所すら作っていないんですよ。私は市長公室で受け入れたらって言ったんですけども、ちょっと勘弁してと言うんですけど。本当に、多分、市役所ですら作ってなくて、来た子供たちが、どういうふうに行った職場でこう考えているかっていうところまでやってないでしょう。いや、そこまでやっぱりちゃんと考えないとキャリア教育にならないと。形だけのキャリア教育だとほとんど意味ないっていうことは、私自身もそう思うので。まあ、しっかりそのあたりを表現できるようにして行きたいと思います。

続きまして納谷委員お願いします。

**納谷委員：** コロナの後、この5年間の中で、まあコロナというものが流行ってしまって、一時全体的にも学校が休校になって、それは学力向上にも関係してくると思うんですけども、家庭学習をせざるを得ない状況になった時に、その自主的に勉強できる力がある子とやはりそうでない子との差がすごく出てしまった時期に丁度この5年間に入ってしまったって、それが要因の一つで学力が下がってしまったというか、学力をつける時期に丁度休校になってしまったので、そこで差がついてしまったのかなっていうふうに私は思っています。

この5年間の中で、タブレットが一人1台っていうのを提供することができるようになって、今、もし、また休校になったりとか、学校の中でもそうですけど、もう一人ひとりタブレットを持って、差がないように、学力の差がないようにしていく教育をできるっていう状況に今な

ってきているので、どうしても学校に出て来られなくなったりとか、コロナとかの要請で出席停止になってしまったりとかで、子供たちにも、学力の差がつかないように、教育を提供できるっていうものややっていっていただきたいというふうに思います。

キャリア教育については、今までずっとその職業体験であったりとか、外部の講師を呼んで学校で話を聞いたりっていうのがあったものが、全く出来なくなってしまうと、今の高校生1年生とか中学生とかは、小学校のとき、中学校のときにキャリア教育できなかったっていう状況があって、大綱の中にもその将来に希望をもつことが出来ないとか、きちんとした目的意識が希薄っていうふうに書いてあるんですけども、やはり、なかなか自分が将来なりたいもの見つけにくい状況っていうのも一つあると思うので、これからの子供たち、今の職業体験を少しずつ再開されているって聞いているので、そこはやっぱりこれからの子供たちに対しては期待をしています。

ただ、その行事とかが中止になったり、縮小になったりとかっていうと、いろいろ出来ない、制限されている中で、子供たちが出来ない中で何が出来るのかっていうのも学校の中ですごく考えて、子供たち自身で考えて行事を行ったりする力がすごく逆に付いた期間であったというふうにも思うので、それを先ほどの自立の話じゃないですけど、うちも整骨院で、子供たちが、高校生も中学生の子も来るんですけど、問診票本人に渡すんですけど、お母さんが書くっていう時代がやっぱりあったりとか、本人に話を聞いても、横からお母さんが全部答えてくる。結構そういうのも私の体験というか、日常的にありまして。でも、学校の中ではすごく自分たちで考えて行動するっていうことを教育されていると思うので、やはり家庭もその力を落とさないとか、協力しながら、子供たちの能力を伸ばしてやっていただきたいと思います。

あと、スポ少に関しては、あの28年に大綱

を作った時は、まだ完全実施はされていない状況から始まって、この5年間の中で完全実施となりまして。各地域の中で、いつも言っていることなのですけれども、やはり指導者の方とか、少年団の立場ですごく協力して努力して今継続をしているんですけども、やはり地域格差っていうのは必ず出てくると思うので、この格差がないようにこれから活動していただきたいと思っています。

ジオパークのことは、ジオパークが認定されたことで、やはり学校の中でも勉強しやすい環境に子供たちがいるっていうのはすごく感じていて、提供しやすい、自分たちの場所にはこういうものがあるよとか、そういうのもやはり提供しやすい学習として、ひとつの扉を開けやすい状況になったと私は思っていて、それを深掘りして行くか行かないかは学校なり家庭なりと思うので、そこをもう少し、せっかく認定されていいものだって、より良い状況であると事業としてやっていただきたいと思っています。

**宮下市長：** はい、ありがとうございます。

最初の話で、自主的に学習が出来る子と、出来ない子とで差が付いたっていうのは、私もそう思っていて、ただ、基本的にそれが実は子供たちの個人ベースだけじゃなくて、地域も同じで、結局全体にタブレットが行き渡るようになって、例えばですよ、青森市は普通にやっているわけですよ。持ち帰らせてオンライン授業ができる環境を作って。ところが、うちはまだ全然そこまで達していない。

人口が多い、人口が6倍の地域で出来ているわけですから、本当はそれが出来る。だから逆に言うと、自主的に学習が出来た地域と出来なかった地域がそれはどっちかっていうと、うちはその場面で見れば出来なかった地域に残念ながらあてはまっちゃう。子供たちだけじゃなくて、本当にそういう地域だということを自覚しないと、多分進めないと思うんですよ。です

から、当たり前のように、これからタブレットを1人1台で家庭でも使えるようになって、学校と家庭の学習がより連動するような形になってくると思うので、そこはしっかりですね、やっぱりやっていく必要がある。

2点目のキャリア教育で、子供たちが見つけにくい環境になったっていうのも、外に出られませんでしたからね。やはり、どうこの期間をフォローして行くかっていうこともすごく大事なことだと思いますし、さっき田中先生に聞いたようなですね、そういう話も含めて考えていきたいと思っています。

やっぱり子供たちが力を発揮できる家庭環境の話も、これも田中先生のところでお話したように、学校がやるかというところでもないと思うんですが、全体として、地域の教育力と家庭の教育力は、市の課題として捉えていきたいというふうに思っています。もちろん、大綱の中に少し触れていきたいと思っています。

中学校もそうですけど、格差がないようにというのは、そのとおりで、今、すごい格差ある。例えば、もう学校によっては陸上部しかない、バドミントン部しかないみたいなのところも中学校であります。小学校でも本当はやりたいスポーツが出来なかったり、やるためには遠くまで行かなきゃいけないっていう環境になっちゃっているっていうのがあるので、そこもしっかりと対応できるように、100%はないと思いますが、取り組んでいきたいと思っています。そのあたりも書き込めるかなと思います。

続きまして、黒木委員にお願いいたします。

**黒木委員：** 書いてある部分はよろしいんじゃないでしょうかっていうことです。これはまずいだろうっていうのはない。

2項対立で言われないと理解できない。要するに、これを落とした、ここに力を入れてって言ってもらえると分かるなあと考えてます。

あと、重点項目7つは多過ぎませんか。4

つぐらいまでしかカウントできない。4つぐらいにしたらどうでしょうと思います。

それと、緊急度と重要度で、ポートフォリオみたいなのを組んで、十字架みたいなプロットしてもらえないと、人もお金のリソースが限られているので、長くなると特にそうだと思うんですよ。何にどれくらい注力するのかっていうのが。円単位にしてもらわないとちょっと分からなくて。誰もわからないんじゃないかなっていう気が。これ市民向けのものですよね。

**宮下市長：**

はい。市民向けです。

**黒木委員：** 学力の向上の円のサイズと何ですかね、夢をはぐくむ教育のサイズと比べて、そのグラフィカルに直感的に見えれば、いいとか悪いとか、投射効果っていう話が可能になるんですよ。今は美しい部分しか書いていない。特に反対する要素はないかな。

そうですね。リソース、どう配分するかっていうのを教えてもらいたい、という感じを決めないと、なかなかいくらでも書けちゃう。以上です。

**宮下市長：** 自治体によっては、なんか市長の気持ちを一行で、みたいなタイプもあるんです。なかなかちょっとまとめ方は確かに難しくて。なんか3、5、7っていうのは、こう極めてまとまりのいい数字で、7だからまあ良いかみたいな話でしか考えないで。

あのおっしゃる通りですね、何に力を入れているとか、ビジュアル的に見て、どういう論点が示されているのかっていうのは、確かに分かりづらくなっているんで、少しそこは工夫して見ます。書き方とか柱立ても含めて。このままにしたとしても、どの辺に力を入れて、どういう風な形になるのかっていうのは、ビジュアルでは示せると思いますので、そのあたりもさせていただきます。

緊急度とか重要度とかですね、全部緊急で全部重要っていうこともなくて、やっぱりこの5年間の次の5年間でやるのはどういうことかということは、当然あると思いますので、どういう段取りでやるのかあると思いますので、そのあたりもやっぱり、もしかしたらスケジュール感があればいいかもしれませんが、ここは取り込みたいと思います。それでよろしいですか？

**黒木委員：** はい、ありがとうございます。

**宮下市長：** 次に長岡委員からお願いします。

**長岡委員：** はい、黒木委員、今おっしゃったように、全体的にこれはいずれも大切であるし、最高ですので、目標を高く掲げているというところに関しては、突っ込みようがないと言うところがあります。

先ほど優先順位をつけたというようなお話もありましたけれども、やはり、少しメリハリをつけていただけるといいのかな。どういうところかと言いますと、やはりむつ市ならではの課題といったもの。特に先ほど田中委員の家庭支援も必要だということをおっしゃっておられましたけれども、まさにそこだろうと言うふうに思います。やはりあの教育格差が厳然と存在しているというような問題意識を持っておりまして、まず、家庭と連携を図ることよりは、家庭に対して教育委員会だけではなく、教育関係機関以外も、どのようにこう経済的にも教育的にも支援をしていくかということが非常に大事なのではないかと思います。

一方でむつ市ならではの、特色、強みといったものが活かされる教育大綱になればというふうに思います。その中で、ジオパーク教育っていうのがありまして、非常にそこに関しては、自分が強い思いがあるんですけども、やはり、Uターンして帰ってきて思ったのは、地域同士のつながり、社会関係資本が非常に強い地域だ

なというふうに思います。ただ、そういう面で強さっていうか、統合型っていうソーシャルキャピタル社会関係資本があるんですが、どちらかというところ結束力があるんですけども、内向きである。また、排他的であるっていうような特徴があるんじゃないか。そうすると、ロールモデルが、共同体の中だけでしかなかかなか見つからない。大学の進学率もそうですし、働き方もそうでありまして、そういった井の中の蛙みたいな状態になってしまっている子供たちが、何を目標に学力を向上しているかに関して、ロールモデルが非常に乏しいというふうに思うんです。そういう中で、今回の教育大綱の中に、地域づくり、人づくり、つながりづくりを実現する資質・能力を持つコーディネーターということで、15ページに書いてありますけれども、それが盛り込まれたということは非常に期待をしている。機能していけばなっていくというものです。

トップを引き上げるということも非常に大事な施策であると思いますし、まさか高校や寺子屋という事業を引き続き継続していきだと思っておりますけれども、ボトムをどうやって上げていくかということに関していうと、教育大綱の中にも何らかの言及があって具体的な施策がひもづいていると理想的かなと思います。

以上です。

**宮下市長：** 市ならではの課題ということをこれから少し触れることと、そして、ジオパークのことは評価していただいてありがとうございます。ボトムアップのことは、どこかに書いているんですか。今の時点で。

**伊藤部長：** 具体には出てきていないです。

**宮下市長：** そのあたりもお願いします。寺子屋については、この後展開していくようであれば協力をお願いします。



**長岡委員：** 寺ですから。

**宮下市長：** 最後教育長お願いします。

**阿部教育長：** はい。私、教育委員会事務局の一員として大綱の策定に携わっておりますので、内容に関してはなくて、学校教育について考えていることを4点お話したいと思います。

まず、1つ目ですけれども、我々義務教育の人間は子供たちの人生100年の中で9年間を預かっています。考えなければならないことは、将来生きて働く学力をしっかりと9年間で身につけさせることだと考えています。表現はいろいろあります。社会的自立という言葉もできますけれども、将来子供たちがしよって立つ力を学力を含めてしっかり付けていく。それが仕事だと思っています。教員は頑張っていますけれども、自分の校種、自分の学年にフォーカスするあまり、先を見ることが減り、どうしても、ファーストチョイスにならない、しっかりそこを共有して、子供たちの将来を支えられるようにして行きたいなと考えています。

2つ目は、ナショナルスタンダードの共有。言い換えれば、むつスタンダードからの脱却だと思っています。すごく子供たち一生懸命頑張っているし、力もあるんだけど、能力をフルに発揮できているかというところでもないし、子供たちは将来遠くない将来、むつを出て青森を出て、全国の同じ歳の子供たちと戦わなければ就職もおぼつかない。そんな状況に放り出されることになります。

そうした時に我々が義務教育のうちから、ナショナルスタンダードを持った子供たちに迫らなければ、そういうハードルをクリアする事は叶わないと思います。

3つ目ですけれども委員の話にありましたけれども、教育環境の差異は確かにあります。ずっと思っていることは、現在の学力は必ずしも充分ではない。むしろ下がっています。

これは市長も指摘されました。その原因かと思っております。あくまで背景であって、原因はその環境の中でどう子供たちが頑張るべきか、我々が示しているそういうところ。そして、その環境差異を超えるためには、ICTとタブレットが非常に大きな力になると思います。距離的、あるいはいろいろな施設との差異を乗り越えることができるので。そうした意味では、なすべきことが目の前にぶら下がっている訳なので、それをしっかり子供たちに与えて、先生方にもしっかり使ってもらって、子供たちにそういう環境を盛り込むことをしていきたいなと思います。

最後になりますけれども、これは市長のご発言にもありましたけど、なかなかこう長期的に見なければならぬものの判断が難しいものも確かにありますね。それに関しては、学校教育の特色でもあります。しかし、我々が方針を定めて何かをするときに、短期的に客観的に見て、向上があるもの、期待しているもの、それが分からなければ施策を継続していいのか、それを中断すべきなのか判断することができません。したがって、短期客観的な指標等に関しても、我々はしっかりと評価をして、それに基づいて我々の事業内容を考えていかなければならない。そんなふうにならなければならぬと考えているところです。

以上です。

**宮下市長：** はい、ありがとうございます。私は、阿部先生とずっと議論していて、まあ何ていうか、そのとおりとしか言いようがないので。

最後、私自身が、これを読んで付け加えてほしいなあっていうふうに思っているのが、2点あって、せっかく作ったので、どうやって広めていくかという、そういう視点は多分大事だと思う。作って作り置きみたいな感じになっているんですね。なんか漬物みたいな

5年間だったような気がする。まあそれはちゃんと教育委員会でやってくれたのかもしれませんが、そういう気持ちもあるので、どうやって広めていくのか、それは学校、家庭、そして地域に。

それから、あと根幹のところにもやっぱり迫っていくべきで、それはですね、授業の改善、子供たちが学校の活動と授業を通じてしか、成長の機会が私たちとしては捉えられないので、授業の改善とか、教員のやっぱり指導プログラム、それから学校の校務の改善のプログラムっていうのを、どのようにして行くのかと言うことを、やっぱり考えていくことが必要なのかなと思っていて。まあ、その視点はおもいっきり入れてほしい。

大きな視点で捉えた時に、子供たち、さっき教育長が100年に一度、9年間って言いましたけど、何を身に付ける9年間にするんですか？ということで行けば、なんか学力の向上とかなんとか言っていますが、やっぱり生きる力だと思うんですね。学力もそのうちのひとつだし、ジオパークの活動とかキャリア教育だっていうそういう本当、生きる力を身につけるために、むつ市は地域をあげて、学校も含めて教育していくんだよっていうそうですね、大きなコンセプトもすごく必要だと思いますので、それから出るようにしてください。

今日の話をもとめますけれども、それぞれからいただいたご意見あったと思いますので、まあしっかりと、一週間ぐらいで、全て誤魔化さずに、ここに書いているみたいでしょっていう話ではなく、しっかりと反映して、ゴチャゴチャになるかもしれませんが、まず反映してメリハリをつけましょう。

黒木委員、長岡委員の言ったように、まあビジュアル的にこれどういう構造になっている大綱なのかということ。

私はイメージがありますので、それをプロットしてもらってもいいんですけど、ちょっ

とを考えていただいて、柱がこれで良いかどうかもう一度検証しながら、分量の部分も含めてよく考えましょう。

あとは、おそらくスケジュール的な今後これをどう進めていくのか、あるいはこれにつながるものがどういうものかなって。それはどうスケジュール作られているのか？みたいな話も含めて、少しちょっと表現してみましよう。

それで、もう一度皆さんに配布をして、確認をしていただいて、その後、校長先生とかパブリックコメントとかそういう段取りにして行きたいというふうに考えていますが、皆さんそれでよろしいでしょうか？

(委員から反対意見なし)

**宮下市長：** はい。ありがとうございます。

それでは第20回も、大綱のまとめる第1回目ということで、以上とさせていただきます。ありがとうございます。

**事務局：** 市長、ありがとうございます。

これをもちまして、第20回むつ市総合教育会議を閉会します。

なお、本日の協議内容、経過については、要点をまとめたうえ、むつ市公式ホームページに掲示することにより公表することといたしますので御了解願います。

また、次回開催については、事務局で日程調整のうえ御案内いたしますので御参集をお願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。